

# 文法力と会話力の向上を目指した 複合活動に関する実践報告

— 初級後期レベルにおける「オーラル・チェック」活動を通して —

許 明子    小池 康    長戸 三成子    三木 杏子

## 要 旨

本研究は、日本語補講コースJ300コースにおいて実施した複合活動「オーラル・チェック」に関する実践報告である。オーラル・チェックとは、各課で学習した文型や語彙を使って表現する能力を高めるために行った複合活動である。各課の与えられた場面において、重要なチェックポイントを確認し、ペアで会話を作って練習した後、グループ活動としてビデオカメラで動画を撮影し、各自の会話を評価、フィードバックを行う一連の活動である。オーラル・チェックの学習効果について、会話例と評価シートの分析を行った結果、コース開始時に比べて以下の3つの変化が認められた。①会話が長くなり、全体的な流れが自然になってきた、②スモール・トークが増えた、③あいづちや繰り返しの確認が増えて、コミュニケーション能力が高くなった。学習者の活動に関するアンケート調査の結果からも、日本語の学習に非常に有効な活動であったという評価が得られた。

【キーワード】 オーラル・チェック    会話力    文法力

## A Report on a Multiple-Activity Aiming to Improve Grammatical Knowledge and Communication Skills : an examination of “Oral Check” activities for advanced beginners

HEO Myeongja, KOIKE Yasushi, NAGATO Minako, MIKI Kyoko

【Abstract】 This is a report on a multiple-activity called “Oral Check”, which is given to advanced beginners (J300) in the Introductory Japanese Courses of the University of Tsukuba. “Oral Check” consists of a series of activities to enhance learners’ communication abilities applying the sentence patterns and expressions learned in each lesson. In the activities, learners recognize conversational points in given situations, compose and practice the conversations in pairs, shoot a video of each other in groups, and evaluate videos by themselves. We analyzed the learners’ conversation and their evaluation sheets in order to examine the effect of “Oral Check.” As a result, three positive changes are shown compared to the beginning of this course : (1) learners conversation became longer and more natural in flow of the story ; (2) increased the uses of small talk before entering the main subject (3) increased the uses of response and repetition to confirm what the partner had said. In addition, the results of the questionnaire survey on this activity indicate that learners considered the Oral Check to be an effective activity for Japanese language learning.

【Keywords】 “Oral Check”, communication skills, grammatical knowledge

## 1. はじめに

本稿は筑波大学留学生センター日本語補講コース<sup>1</sup>初級後期レベルJ300コースにおいて、口頭能力の向上を目指して複合活動として行った「オーラル・チェック」(Oral Check、以下OC) 活動に関する実践報告である。OCは、コミュニケーション・アプローチを目指した日本語初級教科書『Situational Functional Japanese』(以下SFJ) に付随した活動である。初級レベルでは新しい語彙や文型の学習が主になりがちであるが、学習した語彙や文型を使った表現力の向上、さらにはコミュニケーション能力の向上を意識させることも重要である。そこで、OCでは教室で新しい語彙や文型を学びつつ、それを使って日常の場面で実際に使えるようにすることを目指した。教室で学んだ語彙や文法、文型が使える実際の場面を設定し、ペアもしくはグループで会話の練習をした後、ビデオ撮影、モニタリングによる自己評価、クラスでのフィードバック、SNSでの動画共有などの一連の活動を行った。

以下、初級レベルにおける、会話力、コミュニケーション能力の向上のためのOCの実践とその学習効果について報告する。

## 2. オーラル・チェックの活動内容

### 2.1 背景

近年、外国語学習におけるコミュニケーション能力の育成の重要性が叫ばれており、様々な観点からの実践が報告されている。特に、コミュニケーション・アプローチの教授法として推し進められてきた「タスク中心の教授法 (Task-Based Language Teaching)」は、ある課題を達成し、実際の言語使用を通して学習を進めていこうというものであり、多くの実践報告がなされている(峯2013、小柳2013、中浜2013、近藤2013、など)。また、Ohta (1999) は第二言語学習の現場では学習者同士のペアワークやグループワークを取り入れたインタラクションが有効であることも指摘しており、畑佐・藤原 (2011) では中上級レベルの学生を対象にペアワーク中の発話を分析し、コミュニケーションの質を上げるためには、言語の表現形式にも注意する活動 (Forms-focused instruction) の実践が報告されている。さらに、萩原 (2010) は、学習者にある特定の語彙や文型を暗示的に与えることによって学習者の産出力を高めるという統語的プライミング効果 (syntactic priming)<sup>2</sup>を日本語教育に応用し、動詞句の産出に関する変化について実践報告を行っている。外国語教育の現場において口頭能力を養成するための練習方法として中核をなしてきたパターンプラクティスについても、コミュニケーション能力の養成に重点をおいた実践報告もあり(平嶋2007)、語彙や文型の学習においても運用能力が重視されていることがうかがえる。

これらの先行研究では教室において実践している教授法こそ違いはあるものの、学習した目標言語を実際に使って自然な表現を身につけるという目的は共通しており、表現力、産出力、コミュニケーション能力の向上を目指している。日本語教育の現場においても、

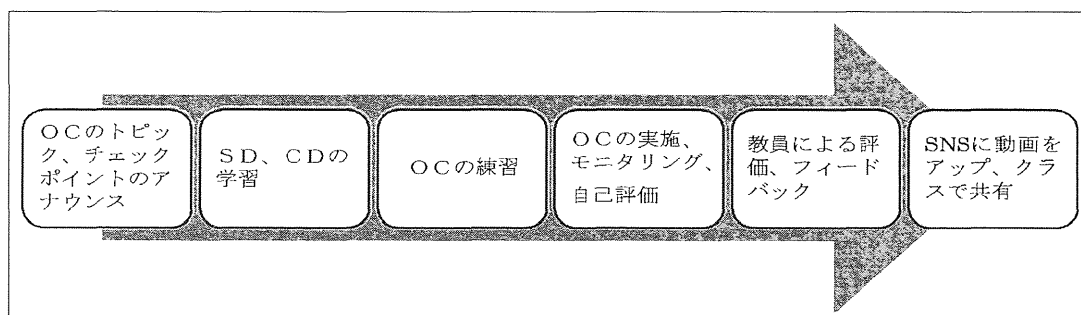
会話力、文法力、コミュニケーション能力を向上させるための様々な実践が国内外で行われている（瀬尾2010、楊2006、など）。

本実践で行ったOCの活動では、多くの実践研究において有効性が認められているペアワークやグループワークを学習現場に取り入れて、各課のタスクを達成するための会話練習を行った。各課の日常場面に基づいた会話場面を設定し、「誘う／依頼する／断る／謝罪する」などのタスクを達成するための会話の練習を行う。会話の練習のときは、各課で学んだ語彙や文型をモデル会話として明示、もしくは暗示することによってプライミングの効果を引き出すようにした。また、OCの当日は会話をビデオ録画、学習者自身による自己評価、教師による評価、フィードバックの一連の活動を連携して行い、活動の内容と到達目標が明確に認識できるようにした。次節では、以上の実践内容の詳細について報告する。

## 2.2 活動の概要

OCは、2013年春学期の1学期間において、課ごとに合計7回実施した。1回分のOCの流れは表1の通りである。

表1 OCの活動の流れ



OCの会話場面は、SFJ Vol.3の学習内容を基に、実生活により密着した会話場面を設定した<sup>3</sup>。各課の最初の授業で、OCのトピックやチェックポイント等の概要をアナウンスし、受講生がこれから学習する内容を意識化できるようにした。OCは会話の練習だけではなく、各課の学習によって日本語で何ができるようになるのかを端的に表す性質も備えているため、あらかじめOCの概要を提示することで、さらなる学習効果の向上を図った。各課で達成すべき目標を視覚的に確認した後で、該当する語彙や文型、文法をSFJのStructure DrillとConversation Drillで学習し、OCの会話練習を行う（OC1日目）。会話練習では、ペアまたはグループでA・Bの両パートを交替して行わせることで、インタラクション効果を目指した。

OC実施の当日(OC 2 日目)の学生の活動はビデオ撮影し、撮影が終わり次第、パソコンで動画を見ながらモニタリングし、学生用の評価シートに沿って自己評価を行う。授業終了後には、教師が教師用の評価シートに沿って評価を行ったあと、またSNSに動画をアップし、クラスで共有できるようにした。受講生には、SNSを利用して、各自のOCの映像を視聴するよう推奨した。これには復習の意味合いもあったが、自分の日本語を話す姿を客観的に見ることで、今後の日本語学習への奮起を期待する側面もあった。

OCの最後(OC 3 日目)にはクラスでフィードバックを行い、各課の目標がどの程度達成されたか、達成できなかった項目は何かについて動画を見ながらクラス全体で議論を行った。

### 2.3 オーラル・チェックのトピック

受講生には、各課の導入時に、各課のトピックに従って、具体的にペアの各パートがどのような状況で何を会話の最終目標とするかを書いた指示文と、各パートの評価項目を記載した資料を配付した(資料1)。

指示文の一例として、17課のものを以下に示す。

#### TOPIC「友達を映画に誘う」

AさんはBさんといっしょに映画に行きたいと思っています。Bさんが行きたくなるような理由を言って、誘ってください。

BさんはAさんに映画に誘われます。質問をしながら、行くか行かないかを決めてください。両方とも学生ペアで行ない、両方とも評価します。

評価項目は、全体の構成(会話の流れ)・Aパート(指示文中の「Aさん」に該当する)・Bパート(同「Bさん」)・その他の4つに関して設定した。「全体の構成」はA・B双方が互いに会話をどの程度スムーズに進行できていたかを評価する項目である。「その他」は(既習の)文法は正しく使っていたか、発音は明瞭であったか、当該課で学習した語彙や文型を使って正しい表現を作っていたかなどについて、総合的に評価を下す項目である(資料1)。

各課OCのトピックとA・Bの各パートは、以下の通りである。

17課「友だちを映画に誘う」A：映画に誘う B：映画に誘われる

18課「研究室に電話をして、伝言を頼む」A：伝言を頼む B：伝言を頼まれる\*<sup>4</sup>

19課「先生の家を訪問する」A：訪問する学生 B：訪問される先生\*

20課「〇〇の作り方を説明する」A：説明を受ける B：説明をする

21課「苦情を言う」A：苦情を言う B：苦情を言われて謝罪する

22課「お見舞いに行く」A：見舞いに行く B：入院している\*

23課「頼みと断わり」A：頼む B：断わる

24課「旅行の相談」 A：旅行の提案をする B：代案を出す

### 3. オーラル・チェックの学習効果

本章では、実際の会話例の分析と評価シートの分析を通して、OCの学習の効果を検証する。活動始めの第17課と活動最後の第23課の会話映像と評価シートの分析した結果、以下の3つの変化が顕著に現れた。

- ① 会話が長くなった。
- ② あいづちや繰り返し確認が増えた。
- ③ スモール・トークを入れるようになった。

次節から、会話例の分析と評価シートの分析を通して、OCの学習効果を検証する。

#### 3.1 オーラル・チェックの会話例の分析

各課の課題も会話のペアも毎回変わるため、同じ条件でその変化を比較することは難しいが、上記の変化が顕著な例として学生A（スリランカ人）の例と、学生B（韓国人）の例を挙げて紹介したい。<sup>5</sup>

まず、学生Aの会話例を取り上げて検証する。第17課は「友だちを映画に誘う」というトピックで、学生X（中国人）から映画に誘われる勧誘の会話、第23課は「頼みと断わり」というトピックで、学生Y（フランス人）から運転を頼まれる依頼の会話である。学生Aはそれ

#### 第17課 「友だちを映画に誘う」学生Aの会話例

01	A：こんにちは。
02	X：あ、こんにちは、Aさん。
03	A：はい、久しぶり。
04	X：久しぶり、元気？
05	A：はい、元気です。Xさんは？
06	X：元気ですよ。うんと、あのう、今週の土曜日はどうですか。
07	A：今週の土曜日は、ちょっと…何か？
08	X：えーと、たぶん人気の映画に行きますが、面白そうです。
09	A：あー、1回行きたいんですけど、ちょっと大学院試験があるので、少し。
10	X：そうですか。
11	A：大学院試験が終わったら、大丈夫。
12	X：大丈夫？良かったな。来週の土曜日はどうですか。
13	A：はい、来週の土曜日は大丈夫。
14	X：じゃ、また来週ね。
15	A：はい、来週。
16	X：じゃ。

それぞれの会話において誘われる側、頼まれる側を担当している。

### 第23課 「頼みと断わり」の学生Aの会話例

01	Y: あ、Aさん、おはよう。
02	A: Yさん、おはよう。久しぶりですね。
03	Y: うん、ね、あのう、お正月、何をした？
04	A: 正月は、あーと、牛久大仏様のところに行ってきた。
05	Y: あ、面白そう。
06	A: うん、楽しかった。もう一度行きたい。
07	Y: うん、良かったわね。あの、ちょっといい？
08	A: あ、いい。何？
09	Y: あの、Aさん、アルバイトやってる？
10	A: あー、まだやってないよ。
11	Y: うん、私やりたいんだけど…
12	A: うーん。
13	Y: アルバイトするために
14	A: うん。
15	Y: 資格外活動許可書を取りに、法務省に行かなくちゃならない。
16	A: あー、そう。
17	Y: あと、電車の乗り方分からないし、車が持っていないし、運転できないし、あの、Aさんは車持っているよね。
18	A: はい、持ってるよ。
19	Y: あの、週末はダメだけど、今週の水曜日は、あのう、連れて行ってくれない？
20	A: うーん、今週の水曜日ですね。
21	Y: うん。
22	A: でも、今週の水曜日、京都に行くつもりなんで…、ちょっと。
23	Y: んー、あー、いつお帰りに？
24	A: 木曜日、帰ってくる予定だよ。
25	Y: あ、そう、あの、他に頼める人がいない、いないです。あ、あの、いつがいい？
26	A: そう、来週なら大丈夫。
27	Y: あ、そう、じゃ、来週、あー、連れて行ってくれない？
28	A: あ、いいよ。
29	Y: わあ、ありがとう。助かるわ。
30	A: はい。

会話の機能に違いはあるものの、Aが受ける側であることや、受けた誘いや依頼を日程の都合で始めは断っている点など会話には類似点が多い。しかしながら、明らかにいくつかの点で会話に変化がみられることが分かる。まず、会話の長さは第17課では1分13秒であったのに対し、第23課では2分2秒とかなり長くなっている。次に、本題に入る前のスモール・トークについても、L23の03から06にかけてお正月の話題を取り上げ、「楽しかった

た。もう一度行きたい」のように気持ちまで表現している。また学生Yについても、自分のこれからする頼みごとの前置きとして07、09、11の会話例のように、学生Aがアルバイトをしているかを聞いている点など会話の流れとして自然だと言える。さらに、やや長くなる学生Yの依頼の内容に対して、学生Aは12、14、16で見られるように、「うん」「あー、そう」などのあいづちを挟みながら、聞いていることを相手に示し、日程などの重要な情報は言葉を繰り返して確認することも怠らない。映像ではアイコンタクトやうなずきなどの非言語的要素も自然にできている。会話スタイルにおいては、友人同士の会話でも丁寧体を使うことが多かった第17課と比べ、第23課ではカジュアルな表現が自然に使えるようになっている。

次に、学生Bの会話例を分析する。学生Bは、偶然にも第17課と第23課で同じ学生Z（ギニア人）とペアを組んでいる。第17課では学生Zから映画に誘われる側、第23課では学生Zから引っ越しの手伝いを頼まれる側を担当している。

#### 第17課 「友だちを映画に誘う」学生Bの会話例

01	Z：おはようございます。
02	B：おはよう。
03	Z：お元気ですか。
04	B：元気です。
05	Z：専門の勉強はどうですか。
06	B：んー、まあ難しいんだけど、大丈夫です。
07	Z：良かった。あのう、今度の日曜、ひま？
08	B：んー、日曜日？何か？
09	Z：映画に行きたいんだけど…
10	B：うん。
11	Z：・・・
12	B：何の映画？
13	Z：新しいアメリカの映画です。
14	B：あー、おもしろ…みたい。でも、行きたいけど、時間…がないし、友達と約束がある…だから、ちょっとだめ、だよな。
15	Z：そう、じゃ、来週は？
16	B：来週は、大丈夫。
17	Z：あのう、6時から大丈夫ですか？
18	B：6時、大丈夫。
19	Z：そうね。つくばセンター、会います。大丈夫ですか。
20	B：うん、大丈夫、知ってます、つくばセンター。
21	Z：はい、ありがとうございます。
22	B：じゃ、また。
23	Z：また、明日。

## 第23課 「頼みと断わり」の学生Bの会話例

01	Z : Bさん、おはよう。
02	B : やあ、おはよう、Zさん。(握手求める)
03	Z : (握手しながら、相手の肩をたたく) ちょっといい？
04	B : うん、いいよ、何？
05	Z : あの、新しいアパートが見つかったんだけど、
06	B : うん、新しいアパート？
07	Z : うん。
08	B : うん。
09	Z : 引っ越し手伝ってもらえないかな？
10	B : うーん、それ、いつ？
11	Z : んー。今度の土曜日。
12	B : 今度の土曜日？
13	Z : うん。
14	B : うん、ちょっと待って、確認… (スケジュールを携帯で確認) するから。んー、えー、今度の土曜日はちょっと…私、アルバイトがあるから。
15	Z : そう、じゃ、アルバイトがあるんですね。
16	B : うん、そうだよ。ごめんね。
17	Z : いや、あー、でも、日曜日はどう？
18	B : んー、日曜日は…次の日？
19	Z : (うなずく)
20	B : あー、ちょっと待って、(再度携帯でスケジュールの確認) あ、日曜日は大丈夫、ひま。
21	Z : あ、時間は、3時から5時まで、大丈夫？
22	B : 午後3時から5時？
23	Z : うん。
24	B : うん、大丈夫よ。
25	Z : そう、良かった。ありがとう。助かるよ。
26	B : 日曜日前に電話してね。
27	Z : うん。
28	B : じゃ、日曜日に会いましょう。
29	Z : はい、会いましょう。
30	B : じゃあね。(握手)
31	Z : また。(握手した上からも手を添える)

まず、会話の長さは、ビデオ録画された会話時間だけをみれば、第17課は1分24秒、第23課は1分28秒とほとんど時間的な長さに違いがないが、第23課は明らかに会話のテンポが速く、不自然な間はない。そのため会話のターンテークの回数をみると、第17課では21回なのに対し、第23課では31回と増えていることが分かる。

スモール・トークについては、第17課では少し入れていたものの、第23課ではむしろ省



略され、すぐに本題に入っている。それにも関わらず、ターンテーキングが増えている理由としては、あいづちや確認が多くなされている点にある。学生Bは学生Zから予定を聞かれた際に曜日や時間を繰り返して確認し、学生Zも学生Bが依頼を断った際に15のように「アルバイトがあるんですね」と理由を繰り返して確認している。また、「んー」「えー」「あー」「ちょっと待って」などのフィラーもよく使用され、不自然な間が埋められている。

さらに、第17課よりもうなずきやアイコンタクトが自然にできているのに加え、友達同士の会話であることを強調するように握手やボディータッチを取り入れたり、スケジュールを確認する際に、実際に携帯電話を出してカレンダーを確認するなど非言語的要素を活用して、会話全体の流れをスムーズにしている。会話スタイルでは、カジュアルとポライトが混在していた第17課と比べ、カジュアルが上達している様子が伺える。

### 3. 2 評価シートの分析

本節ではOCのチェックシートに学生と教師が書いたコメントを中心に、授業開始時から授業終了時までどのような変化が見られたかについて、3名の学生を例に見ていくこととする。なお、紙面の都合上すべての課を取り上げることはできないため、OCの初回である第17課と比較して、明確な変化があった課のコメントを抜粋した。また、それに対する教師のコメントも抜き出した。

表2 学生Mの評価シート（抜粋）

	学生コメント	教師コメント
17課	①発音はよっと（＝ちょっと）問題があります。 <sup>6</sup> ②話すの時、もっと早くいいと思います。	もうすぐ週末 <sup>を</sup> →が来ます。 来週「らいしょう」と聞こえます。
20課	①発音がちょっとよくなかった。たとえば、「キャベツ」「材料」 ②相手にはんのうした時、使った言葉は1つだけ「はい」だけを使いました。	⇒いろいろな表現が使えると会話が楽しくなりますね。
22課	「すぐよくなりましたね」と言った（すぐよくなりますね） 前に比べて流暢になった	事故にあったとき、びっくりしましたね→したでしょう

表2は学生Mの評価シートを抜粋してまとめたものである。学生Mの場合、初回の17課では「発音に問題がある」とことと「もっと早く話すべきだ」という2点が述べられている。しかし、どちらのコメントも具体的な点には触れられていない。これに対し、教師のコメ

ントでは助詞の間違いや発音に関する注意点が述べられている。一方、4回目の実施である第20課では、発音がよくないと感じた語彙が具体的に挙げられており、会話で相手の発言を受けた際の自身の反応が「はい」だけだったことにも触れている。さらに、6回目の実施である第22課では、「すぐよくなりましたね」という文法の間違いについて自身で修正することができているほか、それまでのOCに比べ、自身のパフォーマンスが「流暢になった」ことにも気が付くことができていた。

表3 学生Pの評価シート(抜粋)

	学生コメント	教師コメント
17課	はなしが面白い かいわができる。 ときどきフォーマルになる	ことばにつまって、「あー」といつて しまうことが多いです。
20課	「ませます」→「まぜます」 しつもんがすくなくいです。	「ゆでてします」→「ゆでます」 「チキンとスープとフォーをさします」 →「入れます」
22課	「おみまいあげなんですけど」 →「おみまいなんですけど」 「びっくりしたですね」 →「びっくりしたでしょう」	自転車にのっていたいんですか。 →のっていたんですか。 今、いたいむんですか。 →いたむんですか
23課	「そこをなかたのむよ」 →「そこをなんとかたのむよ」 「あたらしいアパートがみつかった けど」 →「あたらしいアパートがみつかった んだけど」	たのみ方は上手ですね。 これからは文法もがんばりましょうね。

表3は学生Pの評価シートである。ここでも、OC開始時の第17課では抽象的なコメントのみ書かれている。一方、第20課以降のコメントでは、「まぜます」という語の清濁を自分でモニタリングし、正しく修正できるようになっている。また、文法についても第23課などで「見つかったんだけど」と正しく修正できている。さらに第22課では入院している相手からけがをした当時の状況を聞いたあと、相手の心情を思いやった発言をしようとしているが、その際の表現についても「びっくりしたでしょう」と自己修正ができている。

発音や文法の誤用について、課によっては自身が気が付くことができた以外の誤用もあり、教師がコメントをつけているものもあるが、少しずつであっても自己修正が具体的にできるようになったというのはOCで経験を積んだ結果だと言え、モニタリングができるようになった証拠であろう。

表 4 学生Hの評価シート（抜粋）

	学生コメント	教師コメント
17課	発音がいいと思いますけど、文法がまちがうところがありました。初めての会 う時あいさつが十分になりませんでした。	約束：「やぐそぐ」と聞こえます。 新しい：あだらし○ 「あたらしい」です。注意！
20課	説明に対して質問が少ない 相手の様子を見ながら説明することは よくできなかったです あいづちはよくできなかった	→質問がしたくなる説明ができるとい いですね。
23課	友だちとして会話時、ときどき「です」 「ます」を使ってしまった。 また、相手のあいづちを聞かなかった。	一人で全部話さないで、少しずつ話し て、あいづちを聞いてください。

表 4 は学生Hの評価シートである。学生Hは第17課のOC開始時から、「初めて会ったときの挨拶が十分ではなかった」という、会話の構成に着目したコメントが現れている。これは、第20課、第23課で、あいづちというより具体的なコメントとして言及されている。あいづちに関するコメントはここに提示した以外の課でも記されているが、いずれも「なかなかあいづちがうまくできない」という内容のコメントであった。学生Hにとっては、相手の反応を見ながら、あいづちをうまく活用した会話は難しいと感じるものであったことがうかがえる。しかし、その点についてモニタリングし、改善したいと感じることができたことは、初級後半の学生にとっては非常に意味があることだと言えるのではないだろうか。

以上、3名の学生の評価シートを紹介したが、OCを各課で実施したことにより、コメントの内容に変化が見られるようになった。コメントの内容としては、「文法」「発音」「あいづちなどの会話の構成に関するコメント」など多岐にわたっている。文法に関するコメントとして、自身の誤用を正しく修正することができるようになったほか、発音についても漠然としたコメントから具体的な内容となっていた。

また、学生Pの評価シートでは、第17課で「ときどきフォーマルになる」とのコメントが、学生Hの評価シートでは第23課で「友だちとの会話で「です」「ます」を使ってしまった」というコメントがあり、フォーマルとカジュアルの使い分けが意識されている様子が見える。これは他の学生のコメントにも全課を通して見られたコメントである。SFJではJ100の初級前期レベルからフォーマルとカジュアルを意識した会話練習が取り入れられており、J300でもフォーマルとカジュアルを区別した練習がされているため、このようなコメントが多く挙げられているのではないかと考えられる。また、このコメントについてはほとんどが「友人関係という設定なのでカジュアルに話したいが、フォーマルな「で

す」「ます」が混ざってしまう」というものだった。カジュアルな会話はしたいがうまくできない、と学生たちが感じていることがうかがえた。

#### 4. オーラル・チェックの活動に関する学生の評価

本コースを受講した学生に対してOCをどのように評価しているのかについて、最終回の授業でアンケート調査を実施した(資料2)。本章では、その結果を踏まえて、OCへの評価について考察する。紙面の制約があるため、活動の評価に直接関係がある設問1) 2) については詳細を報告し、3) 4) 5) の結果については簡潔に報告する。

調査項目は1～5の大問からなり、各大問は以下のような内容である。

- 1) OCにより自己の日本語能力が向上したか。
- 2) OCによりどの日本語能力が向上したか、また、より上達したかった能力は何か。  
および、OCのよかった点、改善すべき点は何か。
- 3) 評価の仕方についての評価
- 4) SNSを利用した復習の有無およびその有効性の評価
- 5) OCの総合的な有効性についての評価

アンケートの回答者数は38名であった。

##### 1) Oral Check で自分の日本語能力はよくなったと思いますか？

Yes/Noの二者択一式で聞いたところ、Yes : 32名 (84.2%)、No : 1名 (2.6%)、無回答 : 5名 (13.2%)であった。8割以上の学生がOCをしたことにより日本語能力が向上したと考えていることが分かる。

##### 2-1a) このクラスが始まった時(10月)とくらべて、自分の日本語はどのくらいよくなったと思いますか？

本設問は、文法・語彙・発音・会話能力の各項目に関して、10月の開講当時と12月の修了時とを比べて、自分がどれほど上達したと考えているかを聞いたものである。なお「会話能力」に関しては、「会話を始める」「会話を終わらせる」「あいづち」「small talk」の4つを調査項目として立てた。従って、調査項目数はこれら4項目と上記の文法・語彙・発音の計7項目である。調査形式は、10月と12月の双方に、上記各7項目について「1: 自信がない」から「6: 自信がある」の6つのスケールを設定し、自分の位置している(していた)と思うレベルを一つ選ばせる形式を採った。

まず、概略的に結果を見ると、10月と12月で選択する数字が同じ学生や項目は見られたが、おおむね小さい数字→大きい数字の評価となっていた。大きい数字→小さい数字となる評価を下している学生および項目はなかった。

表 5 日本語力の向上について

10月の平均

項目	1. 文法	2. 語彙	3. 発音	4a. 開始	4b. 終結	4c. あいづち	4d. ST
回答者数	36	35	35	36	35	37	35
平均値	2.50	2.74	3.03	2.61	2.60	2.65	2.37
標準偏差	0.76	0.87	1.00	0.86	0.93	0.85	0.86

12月の平均

項目	1. 文法	2. 語彙	3. 発音	4a. 開始	4b. 終結	4c. あいづち	4d. ST
回答者数	36	35	35	35	34	36	35
平均値	3.97	3.97	4.11	4.09	3.97	4.06	4.03
標準偏差	0.80	0.70	0.78	0.81	0.75	0.91	0.84

10月→12月の平均上昇値

項目	1. 文法	2. 語彙	3. 発音	4a. 開始	4b. 終結	4c. あいづち	4d. ST
上昇値	1.47	1.23	1.09	1.47	1.37	1.41	1.66

次に、どの項目の評価の上昇率が高かったのかを見てみる。表 5 は10月と12月の各項目の平均値と標準偏差、および10月から12月の平均値の差（＝上昇値）を示したものである。このうち、自己評価の平均値を見てみると、10月の段階では「4d.ST（＝Small Talk）」が2.37と7つの項目内で最も低かったのが、12月では4.03と、1.66の上昇値を示している。これは平均値の上昇率が7つの項目のうち一番大きい。一方、「3.発音」は10月の段階で3.03と全項目中最も高い数値を示していたが、12月の段階では4.11と、全7項目中最も高い数値ではあるものの、その実質的な上昇値は1.09と、7項目中最も小さいものであった。OCの実施回数が多くなるにつれ、スモール・トークが増えて自然な会話の展開ができるようになったことについて前述したとおりであるが、受講者によるアンケートからも同じ結果がうかがえた。

2-1b) 今よりももっと上手になりたかったものはどれですか？

本設問は、2-1aで調査項目とした7項目の中で、クラス修了時にもっと能力を向上させたかった項目は何かを、複数回答可として聞いたものである。表 6 はその結果である。

表 6 上手になりたかったもの

	1	2	3	4a	4b	4c	4d	4e
	文法	語彙	発音	会話を始める	会話を終わらせる	あいづち	small talk	その他
合計	24	24	14	14	12	10	18	3
%	63.16	63.16	36.84	36.84	31.58	26.32	47.37	7.89

表6を見ると、「1.文法」や「2.語彙」の選択率が相対的に高くなっている。これらに対して、発話能力に関連する4のa～dの各項目は、文法や語彙ほどの選択率とはなっていない。

以上、2-1aと2-1bのアンケート結果より学生は、OCが自己の会話能力の向上に役に立ったと実感していること、および文法や語彙についてはもっと上達したかったと認識していることがわかる。ただ、実際のOCの授業では会話ほどではないにしても、文法や語彙についても学生に喚起する指導を行っていたため、文法や語彙の学習が会話練習の陰に隠れて学生に気づかれなかったという面もあると思われる。会話力の向上とともに文法力、語彙力との関連性を認識させる必要があるといえる。

### 2-1c) Oral Checkのよかったところは何ですか？

本設問は、自由記述（和文もしくは英文、以下同）で行った。36名から回答が得られ、そのうち21名の回答「日本語での日常会話の練習ができたこと」というものだった。その他に、「自信や勇気がつき、日本人と話すことへの抵抗感が少なくなったこと／ビデオ撮影をし、受講生間で確認できたこと／SNSを利用したことにより、自分自身でも確認できたこと／先生が文法を修正してくれたところ／事前準備（練習）をしなければいけないところ／クラスメートとの交流がたくさんできるところ」等の回答が数名見られた。

### 2-2) Oral Checkで、いらないところ／直したほうがいいところは何ですか？

本設問も自由記述で行い、12名から回答が得られたが、内容は大きく「不満」と「修正案」に分けられる。「不満」としては、「練習時にそばに先生がいてほしかった／録画をしたこと／会話が短かった。もっと長い会話がしたかった／自己評価がわかりづらかった」等が含まれている。「修正案」としては「モデル文を提示せずに、学生が自分で文（会話）を作ったほうがよい／複数の課を組み合わせた会話練習をする／日本人学生を交える」が挙げられていた。

「不満」のうち、ビデオ録画について不満を感じていた学生には、自分の話している映像を実際に見てフィードバックを行うことが、日本語能力の上達に効果があることを説明した上で、了解を取っていたが、やはり学生の中にはビデオ撮影が心理的な負担となってしまった者もいたようである。

### 3) 評価の仕方についての評価

評価の仕方に関する設問では、自己評価より教員による評価が分かりやすいという回答が多かった。OCの実施回数が進むにつれてモニタリング力が上がり、具体的な自己評価ができるようになってきていたが、初級レベルでは教師による評価がより重要であること

がわかる。

#### 4) SNSを利用したの復習の有無およびその有効性の評価

SNSの利用に関する設問では、38名中「まったく見なかった」が13名(34.2%)、「各課につき1、2回」が14名(36.8%)、「1週間に1回」が4名(10.5%)、「その他」2名(5.3%)、無回答5名(13.2%)であった。少なくとも1回は見た学生が半数近くいた反面、まったく見なかった学生が3分の1程度いたということになる。SNSを利用する学習法について、その良かった点を自由記述させた設問では「自分の間違いが確認できる」が19名で最も多く、「自分の発音を確認できる／他の学生が行なった会話が勉強できる」という回答も数名見られた。

SNS利用に関する改善点についての自由記述では8人から回答が得られて、「他の学生に自分の映像が見られるところ／自分の映像に対する他の学生からのコメントをもらえるようにする／個人宛にメールで映像を送ってほしい／映像を探しやすくしてほしい／SNSを見ない学生が出ないように、1回は視聴するよう「強制」("force")すべきである／評価を受けた後に再度OCを学生に課す」等の回答が見られた。

#### 5) Oral Check の総合評価およびその理由

本設問は、OCの総合評価として、「1.まったく役に立たなかった」から「5.役に立った」の5つのスケールのどこに該当するかを選ばせ、かつそのように評価を下した理由を自由記述してもらったものである。36名が回答した。その結果、評価の平均値は4.03で、点数別に見ると、5点が9名(25.0%)、4点が19名(52.8%)、3点が8名(22.2%)、2点と1点は0であった。

以上の結果より、本クラスにおけるOCに対する評価は、おおむね良好であったと見なしてもよいと言えるであろう。

また、評価理由には36名中11名が記入しており、その評価理由としては、すべて日本語での会話能力が上達したことを実感した旨の記述であった。

### 5. おわりに

近年、日本語学習者のニーズが多様化しており、コミュニケーション能力の向上は重要な課題になっていることは周知のとおりである。学生のニーズに応えるべく教育現場では様々な教授法が模索されている中、本コースではタスク中心の教授法を応用し、オーラル・チェックという複合活動を行い、その学習効果について検証を行った。学生の会話例の分析から、スモール・トークを入れた自然な会話を組み立てられるようになり、会話が長くなった点、またあいづちが増え、コミュニケーション能力が高くなっている点が確認され

た。また、評価シートの分析から自身の会話をモニタリングする能力が向上し、正確さや流暢さを意識するような変化が見られた。コース終了時に実施したアンケート調査から、日本語の上達に最も有効な活動だったという回答が得られており、学生自身も会話力の向上に役立っていることを認識していることが分かった。

しかし、初級レベルで、教室で学んだ新しい語彙や文法項目を会話やコミュニケーション活動に応用することは容易なことではない。本実践ではSNSを取り入れて教室外の自律学習に結び付ける試みもあったが、十分に活用できたとはいえない。教室だけにとどまらず、実際の場面にも応用できるような実践的な能力を身につけるための活動については今後の課題としたい。

## 謝辞

本実践およびアンケート調査にご協力くださった学生の皆様にお礼申し上げます。

## 注

1. 2013年度から2学期制への移行に伴い、日本語コースのカリキュラムの再編が行われた。カリキュラムの編成や各レベルの授業アンケートの結果については加納(2014)を参照されたい。
2. 萩原ではプライミング効果を「事前授与」と呼んでいる。教室で学習した項目を産出させる前に絵や語彙、文型を授与することによって目標とする文型が自然に出てくることを目指した教授法である。
3. SFJには各課の最後に「Role Play」のタスクがあるが、OCはこれとは別に、受講生への評価の対象(=テスト)として設定されたものである。また、OCは基本的に所与の場面・状況におけるペアでの会話を想定しており、またそれぞれの役割や会話の最終目標(到達点)を明確に提示している点でも「Role Play」とは異なる。
4. 18課・19課・22課のBパートに“\*”が付されているのは、当該課ではBを評価対象とはせず、Aパートのみを評価対象としたことを示している。これは、その課において、Aパートが会話の中心として比重が置かれているためである。しかし、Bパートを担当する学生に対しては、Aパートの発言に対して適切に応答しているか、また流れを考慮しながら会話をしているかという点に限って、評価の対象とした。
5. OCの会話例や評価シートの分析については個人情報の保護や、研究目的について説明し、承諾を得ている。また、本実践研究で実施したアンケート調査についても学生に個人情報の保護、調査目的等を説明し、留学生センター倫理委員会で承認されたものである。
6. 学生の自己評価の記述は評価シートをそのまま転載したものである。



## 参考文献

- Long, M. H (2000) Focus on form in task-based language teaching. In R.L. Lambert, & E. Shohamy (Eds), *Language policy and pedagogy*, Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins. 179-192
- Ohta. A. S. (1999) Interactional routines and the socialization of interactional style in adult learners of Japanese, *Journal of Pragmatics*, 31, 1493-1512
- 加納千恵子 (2014) 「留学生センター日本語コースにおける授業評価」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 29号 : 245-282
- 小柳かおる (2013) 「タスクによる言語学習が第二言語習得にもたらすインパクト」『第二言語としての日本語の習得研究』 16号、第二言語習得研究会 : 16-37
- 近藤ブラウン妃美 (2013) 「日本語評価のためのタスク型アチーブメント・テスト」 16号、第二言語習得研究会 : 56-73
- 瀬尾匡輝 (2010) 「海外でのTask-Based Language Teaching (TBLT) の試みー社会人教育機関の初級クラスにおける実践」 WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』 日本語教育学会HP  
[http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2010Forum/2010P6\\_seo.pdf](http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2010Forum/2010P6_seo.pdf)
- 中浜優子 (2013) 「タスクの複雑さと言語運用 (正確さ、複雑さ、談話の視点設定との関連性)」『第二言語としての日本語の習得研究』 16号、第二言語習得研究会 : 38-55
- 萩原章子 (2010) 「プライミング効果と構文内の動詞句の産出に関する検証」『ICU日本語教育研究』 国際基督教大学日本語教育研究センター : 3-18
- 畑佐由紀子・藤原ゆかり (2011) 「外国語としての日本語の授業におけるタスクタイプと学習者の発話と焦点かの分析」『広島大学院教育学研究科紀要』 第60号 : 163-172
- 平嶋里珂 (2007) 「コミュニケーション能力を養成するためのパターンプラクティス」『外国語教育研究』 第13号 : 79-95
- 峯布由紀 (2013) 「第二言語習得・言語教育から見た「タスク中心の教授法 (TBLT)」ーイントロダクション」『第二言語としての日本語の習得研究』 16号、第二言語習得研究会 : 5-15
- 楊小雁 (2006) 「コミュニケーション重視活動の展開ー「総合日本語」の授業の改善を目指してー」『日本言語文化研究会論集』 第2号 : 31-58

資料1 OCの例 (17課)

**Check Point 1: 全体的な構成**

- ①AとBが会ったところから別れるところまでスムーズに  
できない—————できる  
1 2 3 4

**About A part**

**Check Point A-1: 出金った時の金話**

- ②Bと会った時の会話 (Small talk) がきちんと  
できない—————できる  
1 2 3 4

**Check Point A-2: 理由を言って、映画に誘う**

- ③理由が  
言えない—————言える  
1 2 3
- ④はっきりと誘うことが  
できない—————できる  
1 2 3
- ⑤会話の内容が  
乏しい (poor) ————— 豊かな (rich)  
1 2 3 4 5  
(「理由が多い」「会話のやりとりが多い」なども含む)

**About B part**

**Check Point B: Aの誘いに答える**

- ⑥Aに対する反応 (あいづちなど) が  
不適切だ (unsuitable) ————— 適切だ (suitable)  
1 2 3
- ⑦映画についての質問が  
できない—————できる  
1 2 3
- ⑧自分の考え・都合 (convenience) を  
言えない—————言える  
1 2 3 4
- ⑨Aに対して、受け入れ (accept) / 拒否 (refuse) がはっきり  
言えない—————言える  
1 2 3

**Check Point 5: その他**

- ⑩文法の正しさ、発音 (pronunciation)、SD項目の使用 etc  
よくない—————とてもいい  
1 2 3 4

合計 / 36

資料2 OCアンケートの一部

J300 Oral Check アンケート

名前 ( XXXXXXXXXX )

1. Do you think your Japanese abilities improve in Oral Check?

Oral Check で自分の日本語能力はよくなったと思いますか？

☒ 1. Yes → go to 2-1a-c

2. No → go to 2-2

2-1a. How much do you think your Japanese skills better than October (started this class) ?

このクラスが**はじ**まった時(10月)とくらべて、自分の日本語はどのくらいよくなったと思いますか？

	10 月	12 月
	Not at all Confident 自信が全然ない	Not at all Confident 自信が全然ない
1. Grammar (文法)	1 - <input checked="" type="radio"/> 2 - 3 - 4 - 5 - 6	1 - 2 - 3 - <input checked="" type="radio"/> 4 - 5 - 6
2. Vocabulary (語彙)	1 - <input checked="" type="radio"/> 2 - 3 - 4 - 5 - 6	1 - 2 - <input checked="" type="radio"/> 3 - 4 - 5 - 6
3. Pronunciation (発音)	1 - 2 - <input checked="" type="radio"/> 3 - 4 - 5 - 6	1 - 2 - 3 - 4 - <input checked="" type="radio"/> 5 - 6
4. Conversation skills (会話能力)		
a. Starting conversations (会話を始める)	1 - 2 - <input checked="" type="radio"/> 3 - 4 - 5 - 6	1 - 2 - 3 - 4 - <input checked="" type="radio"/> 5 - 6
b. Ending conversations (会話をおわらせる)	1 - 2 - <input checked="" type="radio"/> 3 - 4 - 5 - 6	1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6
c. Back-channeling (あいづち)	1 - <input checked="" type="radio"/> 2 - 3 - 4 - 5 - 6	1 - 2 - 3 - <input checked="" type="radio"/> 4 - 5 - 6
d. Small talk	1 - <input checked="" type="radio"/> 2 - 3 - 4 - 5 - 6	1 - 2 - 3 - <input checked="" type="radio"/> 4 - 5 - 6

2-1b. What parts of your Japanese abilities that you wanted to progress more?

(multiple answers allowed)

今よりもっと上手になりたかったものはどれですか？ (複数選択可)

☒ 1. Grammar (文法)      ☒ 2. Vocabulary (語彙)      3. Pronunciation (発音)

☒ 4. Conversation skills (会話能力) :

4-a. Starting conversations (会話を始める)

b. Ending conversations (会話をおわらせる)

c. Back-channeling (あいづち)

d. Small talk

e. Other (その他) → [ XXXXXXXXXX ]

5. Other (その他) → [ XXXXXXXXXX ]